

# 『勇者、辞めます』

#11「」

決定稿

2021/05/014

村越 繁

## 【登場人物】

レオⅡデモンハート  
エキドナ

シュテイナーナ  
リリ  
メルネス  
エドヴァルト

パン屋の女主人  
人間の子供  
魔族の子供  
聖都の住民たち  
魔族の侵略を伝える兵士  
魔族 A  
魔族 B  
インプ  
ほか

○アバン・セシヤト山脈

——エキドナ視点。

(#10・抜粋リフレイン)

天に向かって激しい光の本流が噴き上がる。

レオが顔を上げると、前方では——

エキドナが全身から激しい光が放ち、

エキドナ「……死ぬのは！ 貴様だ……！」

眩い輝きの中、エキドナの前に紫色の光芒——巨大な魔法陣が形成されていく。

エキドナ「アアアアアッ！」

形成された魔法陣が眩く輝く。

エキドナ（オフ）「対勇者拘束呪——」

レオに向かって両手を突き出し、

エキドナ「《アンチ・レオ》……！」

光芒が勢いよく放たれる（設定メモ参照）。

（リフレインここまで）

レオに向かって飛んで行く光芒。

エキドナがレオを見る。

レオもまた、エキドナを見ている。

エキドナ「……！」

レオが、一瞬、視線を落とし、

再び光芒を真つすぐに見つめる。

エキドナ（M）「……！ ダメだ！ かわされる……！」

悔しげに顔を歪めるエキドナ。

エキドナ（M）「なんたるブザマ……！！ 何も守れぬまま、何も

得られぬまま、我はここで果てるのか……！」

その時、エキドナが何かを見て、

エキドナ「（ハッとなる）！」

視線の先、レオは迫りくる光芒を——避けずに、口元に満足げな笑みを浮かべていた。

レオ「——（何かを咄く〓セリフは後述）」

直後、『アンチ・レオ』の光芒が届き、微笑むレオが光に溶けていく——

○OP

○レオの過去・研究所（3000年前）

暗い水の中。

響き渡る音声。

プログラム音声「人類を守れ——悪しきものから、人類を守れ。」

——悪しきものから、人類を守れ。——悪しきものから

——

コポ、と泡立つ気泡（音声止まる）。

シリンドラーの一つで培養されているレオ。

レオ（N）「……世界を救え——」

ゆっくりと目を覚ます。

レオ（N）「絶対命令を受けて、俺は生まれてきた」

円形の空間に、レオと同じ大型シリンドラーが11個並んでいる（すべてにDHシリーズが入っているがレオ以外は見せない）。

○とある戦場

火の手があがる工業地帯（※例えば、京浜工業地帯や、堺泉北臨海工業地帯のような場所）。

そこに降りたつレオ。

周囲には多くの魔族。

レオが腰のブレードを抜く。

と、魔族が一斉にレオに襲い掛かる。

迎え撃ち、次々と魔族を斬り捨てていくレオ。

レオ（N）「最初は良かった——」

× × ×

——フラッシュ。#8。エイブラッドの姿。

レオ（N）「あのインプが——エイブラッド先生が言った通り——」

——

× × ×

やがて最後の魔族を斬り捨てるレオ。ほんの僅か、微笑みを讃えたような表情（露骨ではなく）。

レオ（N） 「世界は、存在意義に満ちていた。人々が、俺の活躍を待ち望んでいた」

## ○別の戦場

走るDHシリーズが次々に跳躍（足元のみ）。

最後に走って来るレオが、同じく跳躍。

レオ（N） 「仲間と共に戦い——」

レオの前方には大型魔族（ドラゴン系）。

大型魔族のブレスを躲しつつ、ブレードを振り下ろすレオ。

レオ（N） 「強敵を打ち倒し——」

破壊された街に魔族の死体が転がる中、軍隊が人々に賞賛されている。

レオ（N） 「世界に平和が訪れる」

それを高所（『鉄塔』あるいは付近の『橋の塔』の上など）から見下ろすレオ。

レオ（N） 「あのころは純粋で、世界に訪れたやすらぎを心から喜んだものだ」

## ○復興した街（50年後＝現在から2950年前）

科学文明が滅んだ後、魔術文明が入り込んだことにより、独特な景観になった街並み。

レオ（N） 「だが、その後に俺を待っていた長い長い平和とは——」

その繁華街。

雑踏（まだ人類のみ）の中を歩くレオ。

レオ（N） 「何一つとして勇者が必要とされない日々——」

人々が笑顔で語らう中、レオだけはどこか鬱々とした表情。

レオ（N） 「俺が存在する意味がない世界のことだった……」

生気なく歩き続けるレオ。ふと気が付くと、周囲の人々が足を止めている。

レオ「？」

皆一様に何かを見つめているようだ。

視線を移すレオ。

今は遺物として形を保つ（ビルに設置された）大型モニターで、『マーズメル、紛争勃発』のニュースが流れている。

レオ「……」

紛争のニュースを見つめるレオの目が、ゆっくりと見開かれていく。

○世界各地・点描（時代もまばら）

——砂漠地帯での戦闘。

人間と魔族の混合部隊と戦うレオ。

魔族にブレードや魔術で対抗する中、科学文明の遺物である戦車やランチャーなどのミサイル攻撃を受け、それを弾くレオ。

レオ「（どこか嬉しそうに）まだこんなもんが残ってやがったのか……！」

と、戦車を叩き潰す。

レオ（N）「地域の紛争——」

——時間経過し、破壊されている近代都市。

人間や魔族の他、半人半魔もいる部隊と戦うレオ。

レオ「（どこか嬉しそうに）結局、人間も魔族も争わねえと生きていけないのかよ」

斬られたヘリが墜落する。

レオ（N）「国家間の戦争——」

——魔族が出現した遺跡（例えばアンコールワットのような）。

レオ「（どこか嬉しそうに）まったく、懲りない奴らだ」

ブレードや呪文を駆使して魔族と戦うレオ。

レオ（N）「そして魔界からの侵略」

返り血を浴びて戦うレオ。その表情は生き生きとしている。（※殺人鬼のような狂氣的イメージではなく、どこか安堵を感じているイメージです）。

レオ（N）「戦っているその瞬間だけ、『君は生きていてもいいんだ』と、世界が証明してくれている気がした」

レオ、戦いつつ、

レオ（M）「また戦える。また勇者になれる……！　また人類を救える！」

×

×

×

——時代が移り行く中、崩壊した科学文明の遺物が朽ちていき、緑が覆っていく。そんな変わりゆく景色の中を戦い続けるレオ。

レオ（N）「そうして百年が経ち、二百年が過ぎた」

——やがて、世界が現在の形になってもなお、山岳地帯、森林、海沿い、町など様々な場所で戦い続けているレオ。

レオ（N）「気が付けば、五百年、千年、それ以上の時間が流れていた。俺は世界のあちこちへ飛び回り、戦い、戦い、戦い抜いた」

——イメージ。研究所の空間に投影されたレオの設計図。

レオ（N）「05—Leo……コンセプトは『超成長』。戦いの中で出会ったあらゆる技が俺の中へ蓄積され、必然的に俺の前から敵はいなくなる」

設計図がシリンダー内のレオの姿になり——

レオ（N）「かつての科学者達が想定した通りの姿がそこにあった」

さらに、長い年月で朽ちた科学兵器が散見する荒野で、多くの魔族の死体の中に立つレオの姿に。

レオ（N）「誰にも負けず、決して死なない、最強の生体兵器が、そこに立っていた」

○聖都レナイエ（現在から約1年半前）

穏やかな街並み。

レオ（N）「そしてまた、長い長い平和——」

雑踏の中を歩くレオ。

笑顔で語らいながら行き来する住民たちはレオに見向きもしない。

どこか鬱々とした表情のレオ。

×

×

×

——パン屋。

パンを買いおうとするレオ。

その前に、人間の子供と魔族の子供が仲良く並んでいる。

人間の子供・魔族の子供「これください！」

と、二人で一緒に一つのパンを出す。

女主人「あら、ひとつでいいのかい？」

人間の子供「大丈夫！」

魔族の子供「はんぶんこするの！」

女主人「そうかい。えらいねえ。じゃあえらい子には、おばちゃんおまけしちゃう」

と、パンをもうひとつ袋に入れてあげる女主人。

人間の子供「いいの！？」

魔族の子供「やった！」

女主人「はい、まいどあり」

と、袋を子供に渡す女主人。

子供たち「ありがとう！」

と、駆けてゆく子供たち。

女主人「（微笑み）ずっとこんな世の中であってほしいねえ」

子供たちを真顔で見送るレオ。

レオ（M）「……おい、なぜ笑えない。ここは微笑むところだぞ。微笑んで、そうですねって答えるところだぞ」

いつまでも微笑むことができないレオ。

レオ（N）「……………いつしか、『世界の危機を待ち望んでいる自分』に気が付いた」

×

×

×

パンを手に、往来する人々を見つめるレオ。

レオ（N）「ここにいるすべての人が、いや、この星の生き物すべてが俺を必要とするような、俺が造られた頃のような、絶望的な状況が訪れてほしい」

——レオのイメージ。

周囲のビル呪文攻撃などによって崩壊する。  
魔族が降り立ち、街を炎の海に変える。

人々が逃げ惑う。

レオ（N）「世界を救いたい。世界を救わせてくれ。世界を救えないと、俺が俺でなくなってしまう！」

破壊しつくされた街。

レオ（N）「人間界にもっと危機を！ 人間界にもっと混乱を！俺の想いは日に日に強くなり——」

頭を抱えるレオ。

レオ（N）「日に日に、バグっていった」

発狂しそうになり目を強く瞑るレオ。

その時——

ハッと何かをひらめき、目を開けるレオ。

瞬間、周囲の街がイメージから現実に戻る。

ふと、視線を移すレオ。

前方には、聖都の象徴である神殿（都庁がある）。

レオ「（見つめ）……自分でつくればいいじゃないか、世界の危機」

自然と微笑むことができるレオ。

## ○研究所・外観

アメリカのグランドキャニオンにある、ウォッチタワーのような朽ちかけた建物。  
それを見つめるレオ。

レオ「なんで、こんな簡単なことに気が付かなかったんだ？」

## ○同・内

入って来たレオ、地下への入り口を開ける。



○同・階段　↓　地下

——地下への階段を下りていくレオ。

——下りきると、チタンの様な金属でつくられた、静謐な空気が流れる廊下を一人歩いていく。

レオ（N）「『人類に害をなしてはならない』。DHシリーズに施された反逆防止機構——」

○同・研究室

薄暗い円形の室内。破損した装置を魔術で復元していくレオ。

魔術の光が、レオをどこか不気味に照らしていく。

レオ（N）「決して考えてはいけない思考マスキング機能——」

復元した装置の電源を入れるレオ。

装置が起動していく。

吹き抜けにくるレオ。眼下の空間を見下ろす。

レオ（N）「それらは、自我の獲得、自我の成長と共にいつの間にか外れていたようだった」

レオの視線の先には、かつて12個の大型シリンドーが置かれていた空間がある（僅かに一部だけ形跡が残っていても）。

レオ「……」

×

×

×

——時間経過し、すべてが復元された研究室（12個のシリンドーも復元されている）。

DHシリーズの設計を始めるレオ。

時に装置そのものを操作し、

時に空間に投影された設計図に手を加え（コミック3巻、該当箇所のイメージです）る。

レオ（N）「俺が導いた、世界の危機をつくるための最適解」

DHシリーズの設計図をひとつひとつ完成させていくレオ。

レオ（N）「DH―01―アリエス、02―タウラス、03―ジ  
エミニ、04―キャンサー、05……06―ヴァルゴ。  
07―リーブラ、08―スコルピオ、09―サジタリウ  
ス、10―カプリコーン、11―アクエリアス、12―  
パイシーズ……」

やがて、完成した11体の設計図を眺めるレオ。

レオ（N）「アカシックエンジンこそ再現できなかったが、後は  
オリジナル通り。三千年前、共に世界を救った英雄達」  
レオの身体から、三千年前のレオが幽体のように現  
れる（イメージ）。

三千年前のレオ「皆さん、お久しぶりです。05―LEOです」  
レオ「久しぶりだな。俺はもうだいぶ変わっちゃったよ」

三千年前のレオ「お仕事の時間です。私に世界を守らせてくださ  
い」

レオ「人類を殺してきてくれ。俺が人類を守るために」

三千年前のレオ「私は、」

レオ「俺は、」

どこか縋るように、時代の異なるレオが言う。

二人のレオ「……まだ死にたくない。生きていたいんだ。勇者と  
して」

しかし誰からの返事もなく、あるのは静けさのみ。

絶望に苛まれ、目を伏せるレオ。

――溶暗。

○王都レナイエ・神殿前（現在から約1年前）

テロリストが身を隠しているかのようにフードマン  
トを羽織ったレオが、神殿を見つめている。

レオ「……」

その時、男（兵士）の叫び声が響き渡る。

兵士（オフ）「魔族が、魔族が攻めて来たぞ！」

レオ「……!?」

見ると、傷ついた兵士が必死に神殿へと向かうところ。  
ろ。

兵士「魔族が攻めて来た！ 聖都に、ここに向かって——」

足がもつれて転ぶ兵士。

兵士「聖王に、お伝えしろ……！」

住民たちが兵士に駆け寄る。

レオ、住民たちをかき分けて、兵士の傍に屈む。

レオ「詳しく聞かせてくれ……！」

兵士「セ、セシャト山脈に、大きな、穴が開いた……！ そこ

から、魔族が……！」

ざわつく住民たち。

レオ「心配ない。俺に任せ——（ろ）」

その瞬間、正気に戻り目を見開くレオ。

レオ「——……！（言葉が続かない）」

住民たちが「（兵士を）神殿に運べ！」 「神殿騎士

団を呼んで来い！」などと騒ぐ中、

立ち上がり、よろよろと後ずさるレオ。

レオ「何を、やっていた……俺は……？」

## ○研究所・研究室

シリンダー内には、すでにD Hシリーズの素体が完成している。

駆け込んできたレオ。

鬼気迫る表情で剣を一閃する。

と、その威力と衝撃波によつてシリンダーなど周囲のものが一瞬にして爆散する。

レオ「はあ、はあ、はあ……！」

膝から頷れるレオ。

レオ「……おいおい、まいったな……」

レオ（N）「俺は、自分の為に人類を滅ぼそうとした。もはや、勇者などどこにもいなかった」

あまりの絶望に笑みさえ浮かぶ。

レオ「こんなもの……本物の悪魔だ。……本物の、魔王じゃないか……」

ズキッと頭が痛んだ気がして、頭を押さえるレオ。

脳内でプログラムが命令してくる（幻聴）。

プログラム音声「人類を守れ。悪しきものから、人類を守れ」

レオ「っ……」

プログラム音声「悪しきものから、人類を守れ」

ゆつくりと立ち上がるレオ。

レオ「……………悪しきものは、ここにいる。俺がそうだ」

レオ（N）「デモンハートシリーズ最後の生き残り、05―Le

oこそが、いま世界で最も邪悪な、倒されるべき敵だった」

プログラム音声「悪しきものから人類を守れ」

ふらふらと歩くレオ。

レオ（N）「俺こそが、私利私欲で世界を滅ぼし、私利私欲で人類の命を弄ぶ、世界最悪の魔王だった」

プログラム音声「悪しきものから人類を守れ」

ガン！ と壁に頭を叩きつけるレオ。

レオ「分かっている。分かっているよ。策はある……………三千年生きてきた俺を、ナメるなよ」

レオの目に覚悟が宿っている。

○聖都レナイエ・神殿・石の間（その翌日）

十二賢者が見守る中、聖王から命をうけるレオ。

レオ（N）「ほどなくして、俺は魔王軍討伐の命を受けた。この世界を救う、勇者として」

命を受けたレオが、聖王に言う。

レオ「私が、かならずや魔王を打ち倒してご覧にいきます」

○魔王軍との戦い・点描（数か月後Ⅱ現在から数か月前）

——とある街。

魔族と戦っているレオ。しかし脳内では真逆の思考が働いている。

レオ（N）「俺は勇者を辞めなければならなかった。悪しきものは倒されなければならなかった」

——別場所。

さらに戦うレオ。

レオ(M) 「だが、ただ倒されるだけではダメだ……！ アカシ  
ックエンジンを、賢者の石を託せる後継者を探さなけれ  
ば……！」

周囲の魔族を倒したレオ。

レオ(M) 「俺を倒すほどに強く、それでいて、人類を見守って  
くれるような奴を——」

と、街に響く悲鳴。

レオ「！」

——路地(#1と同場面)。

レオが来ると、魔王軍の雑兵が住民を襲っていた  
(ただし、まだ雑兵や住民たちとは距離がある)。  
その時——住民と雑兵の間に、エキドナが降り立っ  
た。

「！？」「エキドナ様……！」と、驚く雑兵達。

エキドナ、怒りの表情で雑兵達をぶっ飛ばす！

「！」となるレオ。

エキドナ「命じたはずだぞっ！ 侵略と言えど無駄な殺しは認め  
ぬ！ 占領地は可能な限り穏便に統治せよ！」

(#1と同場面、ここまで)

エキドナ、周囲の魔族に聞こえるように叫ぶ。

エキドナ「よいか、今一度命じる！ 無用な略奪、破壊、放火は  
すべて禁ずる！ 民間人の虐殺などもつてのほかだ！

我らの狙いは戦ではないということを忘れるな！」

ポツツと呟くレオ。

レオ「……侵略しておいて勝手なことを」

○とある街付近の高台(夕方)

(先程エキドナを見た)街を見下ろすレオ。

レオ(N) 「だが、エキドナはこれまでにいなかったタイプの魔王  
だった」

○点描・魔族を尋問するレオ

――夜の森。

魔族に剣を向けて尋問するレオ。

魔族A（男） 「エキドナ様は変わり者だ。あのお方はただ魔界を救いたがために、やむなく人間界への侵攻を決めた。そんな魔王の話は聞いたことがねえ……」

――夜の荒地。

また別の魔族を尋問するレオ。

魔族B（女） 「あれほど立派なお方は他にいない。侵略はすれど決して人間を辱めてはならぬと命じ、自ら前線で指揮を執ることでそれを実践してみせてくださる」

――夜の廃墟。

インプを尋問しているレオ。

インプ 「俺達インプのような下級魔族にまで労いの言葉をかけてくださる……優しいお方よ、エキドナ様は」

○とある街付近の高台（朝焼け）

高台に戻ってきたレオが、傍に浮かぶ魔眼（受信スフィア）に目をやる。

そこに映っているのは（夜通し指揮を執り続けた）エキドナの姿。

レオ「よりによって魔王とはな……ただ――」

レオ、希望が宿った眼差しで見つめ、

レオ（N） 「もしかすると、このエキドナならば自分の後継者になれるかもしれない。いやそれどころか、自分の心臓を引き継ぎ、人間界と魔界の懸け橋になってくれるかもしれない。そう思った」

レオが決意の表情で呟く。

レオ「コイツの、面接をしよう」

歩き出すレオ。

レオ「とりあえず、世界を救うところからだな」

○戦場・各地

——様々な戦場で、魔王軍と戦っていくレオ。

レオ（N）「その日から、俺の最後の旅が始まった——」

——各四天王とレオの戦い（#1の回想をなぞる形で）。

——エドヴァルトと戦うレオ。

エドヴァルト「戦士の誇りに懸けて、ここは通さぬ！」

レオ「ならこっちは、勇者の名に懸けて通らせてもらおう！」

レオとエドヴァルトの剣が激しく交わる。

レオ（N）「それは勇者を辞めるための旅だ」

——メルネスと戦うレオ。

メルネス「お前は、必ず殺す……！」

レオ「おう、やれるもんならやってみろ！」

レオとメルネスが技の攻防が繰り広げる。

レオ（N）「勇者レオを殺すための旅だ」

——リリと戦うレオ。

リリ「エキドナちゃんを傷つけないで！」

レオ「馬鹿かお前は！ そんな甘いこと言ってる状況じゃねえだろうが！」

レオとリリの力がぶつかり合う。

レオ（N）「エキドナ直属の四天王がどんな奴か確かめる」

——シュティーナと戦うレオ。

シュティーナ「エキドナ様の願いを叶えるためなら、魔界に平和をもたらすためなら、この命、惜しくはない！」

レオ「おいおい、まるでそっちが勇者みたいなセリフじゃねえか！」

シュティーナの魔術による連撃を弾くレオ（ステイシスを唱えている最中をイメージ）。

レオ（N）「信頼に足る連中なのかを確かめる」

——エキドナと対峙するレオ。

エキドナ「貴様が、勇者レオ……！」

レオ「魔王エキドナ、どれほどのものかみせてもらおう」  
両者が突進し、激しく切り結ぶ。

レオ（N） 「彼女に仕え、彼女の想いを聞き、俺の心臓を託すにふさわしい相手なのかを確かめる」

エキドナとの戦い。

レオ（N） 「そして俺は死ぬ」

スーパーエキドナとの戦い。

レオ（N） 「魔王は倒されねばならない」

やがて、エキドナを倒すレオ。

レオ（N） 「それが、世界の真実だからだ」

とどめをささず、その場を去っていく。

レオ（N） 「……三千年を生き、すっかりバグった生体兵器が選んだのは——」

レオ、目を閉じる。

レオ（N） 「そんな滑稽極まりない、自殺ショーだった」

——溶暗し、黒画面。

エキドナ（セリフ先行） 「……死ぬのは！ 貴様だ……！」

○現在に戻って——セシャト山脈

——ここからレオ、エキドナ両者視点。

エキドナを見るレオ。

眩い輝きの中、エキドナの前に紫色の光芒——巨大な魔法陣が形成されていく。

エキドナ 「アアアアアッ！」

形成された魔法陣が眩く輝く。

エキドナ 「対勇者拘束呪——」

レオに向かって両手を突き出し、

エキドナ 「《アンチ・レオ》……！」

光芒が勢いよく放たれる。

自分にまっすぐと向かってくる紫の光芒。

レオがエキドナ見る。

エキドナもまた、レオを見ていた。

レオ 「……」

一瞬、視線を落とすレオ。

再びエキドナ見つめると、どこか哀しく微笑む。



レオの表情にハツとなるエキドナ。

エキドナ (M) 「まさか……」

微笑みを讃えたレオが呟く。

レオ「ありがとな」 (※エキドナには聞こえない)

エキドナ (M) 「ああ……あの笑み……もし、レオの目的が、私の予想通りなら——」

ズドオオオオオオン！ と、エキドナの放った『アンチ・レオ』が直撃する。

その瞬間、『アンチ・レオ』による特殊な空間に入る二人。

エキドナが、『アンチ・レオ』の反作用に呻く。

エキドナ「ぐ、ううおおおおおお……！」

歯を食いしばるエキドナ。奥歯がボギンと砕ける。口、と鼻から血が流れ出した。

エキドナ (M) 「くっ……！ 全身の骨が軋む。今にも五体がバラバラになりそうだ……！」

目と、耳からも血が流れ出した。

エキドナ (M) 「当然だ、三千年蓄積されてきた力を、我一人で抑えようというのだから……！」

凄まじい気力のみで己を奮い立たせつつ、

エキドナ (M) 「二度目はない……！ コイツの力を封じられるのは……あと、六秒が限度か……」

一方、『アンチ・レオ』による激痛に耐えているレオ (表情は歪ませない？)。

レオ (M) 「ここまで追い込まれるのは、久しぶりだ……身体が重い……指一本、動かせねえ……ヴァルゴから学んだ自動復元機能、アクエリアスから学んだ自動反撃機能、タウラスやキャンサーの自己強化呪文、ジェミニの高速軌道……すべて、すべて、すべてすべて封じられた……最弱だった頃の、05—Leoだ……」

レオは微笑む。

レオ (M) 「やけに時間が経つのが遅せえ……これが、走馬灯つてやつか……やつと、死ねるんだな……」

エキドナを見るレオ。

エキドナ「かはっ！（と、血反吐をはく）」

しかし、その眼は死んでいない。

レオ（M）「随分とつらそうだ……だが、俺を倒せると、仲間がやってくれると、信じてる目だ……」

——一方、エキドナはレオの目を見て思う。

エキドナ「なんという目で、我を見るのだ貴様は……！」

苦痛、哀しみ、齒がゆさに顔を歪ませるエキドナ。

エキドナ（N）「予感があった」

×

×

×

——回想フラッシュ・魔王城・エキドナの部屋（新規）。

シテイナー「エキドナ様、勇者レオなる者が次々に兵士たちを打ち倒しているようです」

エキドナ「！」

眉間に皺をよせ、考えるエキドナ。

エキドナ（N）「その名を聞いた時、対勇者呪文と同じ名であることに引ッ掛かりはしたのだ」

棚から本を取ったエキドナ。ページを開く。

ページには魔王の系譜図。

エキドナ（N）「ただ呪文を編み出したアスタロトは数百年前の魔王。戦った人間が生きているはずはない。そう思った……」

——#9。山頂へ向かうエキドナとレオ。レオが自らの正体を明かす。

エキドナ（N）「だが、レオが機械文明出身だと聞いた時、再び沸き上がった予感は一気に確信へと変わった」

×

×

×

——回想戻って。

グッとするせない表情を見せるエキドナ。

エキドナ（M）「こいつは、三千年生きて来た勇者なのだ。アスタロトと出会ったのも、歴代の魔王が戦ってきた異なる名の勇者たちも、すべて、この目の前にいる一人の男なのだ——」

エキドナを見ているレオ。

エキドナ (M) 「仲間も、帰る場所も、死に場所すらもなくして、それでもたった一人で人類を守り続けて来た、ひどく孤独な奴……それが、勇者レオなのだ……」

こみあげる想いに、目から流れる血と涙が混じる。  
そんなエキドナを見つめるレオ。

レオ (M) 「なんて顔してやがる。大丈夫だ……お前なら、やれるよ」

満身創痍の四天王たちが、僅かに残った力を奮い立たせ、立ち上がろうとしている。

レオ (M) 「一人で出来ることなどたかが知れている。だからこそ、自分以外の誰かを信じる……それが勇者に求められる、一番の資質なんだろう」

レオは自虐的に微笑む。

レオ (M) 「その点、俺はダメだったな。勇者としては最悪だ……誰も、信じられなかった」

レオとエキドナ、二人の想いが交錯していく (レオとエキドナがカットバックをイメージ)。

エキドナ (M) 「お前はどんな想いで、永き時を戦ってきた……！　なぜ誰にも弱みを見せられなかった……！　なぜ誰にも心を開けなかった……！！」

レオ (M) 「世界は自分が守ってやらなきゃダメだと思っていた。勇者でない自分を受け入れてくれるところなど、どこにもないと思っていた」

エキドナ (M) 「死ぬ直前まで、凝り固まった使命に振り回された愚か者めが……！！」

レオ (M) 「人にもらいたいことは何でも、あなたがたも人にしなさい、って、誰かが言ってたな……」

目を閉じるレオ。

レオ (M) 「そうか……ははは……笑える話だ」

エキドナ (M) 「こんなもの、まったく笑えぬわ……！！」

×

×

×

——インサート (新規)。魔王城。

四天王にアドバイスをする黒レオ。

レオ (オフ) 「上から目線で偉そうにアドバイスを出し——」

その様子を頼もしげに見ているエキドナ。

エキドナ（オフ）「四天王どもを散々助けておきながら——」

談笑するエキドナと四天王を、羨ましそうな（自分もこうありたいと思うような）目で見つめるレオ。

レオ（オフ）「とどのつまりはなんでもない——」

×

×

×

目を開けるレオ。

レオ（M）「俺は……俺もまた——」

エキドナ（M）「助けて欲しかったのだろう……！」

レオ（M）「勇者じゃない俺を認めて欲しかったんだ……！ 勇者じゃなくてもいいから、一緒に来い。私がお前を助けてやる。ひとこと、誰かに、そう言つて欲しかったんだ……」

レオの目から、無意識に涙が溢れる。

エキドナ（M）「こいつは人を守るために戦い、こんなにも傷ついた……！ ならば、誰がこの勇者を守るのだ……！ 闇の底で苦しんでいるこの男に、誰が、手を差し伸べるのだ……！」

自由の効かぬ身体で、僅かにエキドナを見るレオ。

レオ（M）「でも良かった。エキドナを選んでよかった。こいつらを最後の相手に選んでよかった……きっと俺が死んでも、代わりに人間界と魔界の橋渡しをしてくれるだろう」

エキドナ（M）「ふざけるな……！ そんなこと、このエキドナが認めぬぞ！ 我が、我らが手を差し伸べてやる……！ この場ですべて終わらせてやる！」

エキドナが声を振り絞る。

エキドナ「四天王……よ！」

立ち上がった四天王たちが、それぞれの武器を構える（リリはフェンリルに変化）。

その姿を見て、レオは思う。

レオ（M）「いい奴らだ……一緒に仕事をした日々、本当に楽しかった」

四天王が、決意と覚悟の表情で向かってくる。

レオ（オフ）「業務改善、兵站、食堂のバイト。指導者としての心得。あんな日々がずっと続けば、最高に楽しかったろう」

レオは呟く。

レオ「ああ、くそ……死にたくない……」

エキドナ「レオ、貴様の望みが勇者の死であるならば叶えてやる。ここで、お前を殺してやる！」

エキドナが四天王たちに向かって叫ぶ。

エキドナ「——四天王よ、あとは、任せた！」

『アンチ・レオ』の特殊な空間が霧散する。

エドヴァルト「！」

リリ「！」

メルネス「！」

シュティーナ「！」

レオの間近まで迫った四天王たちが、全身全霊を込めた一撃を叩き込んでいく。

大剣を叩きつけるエドヴァルト。

エドヴァルト（M）「レオ殿……！」

吹っ飛ぶレオ。

猛毒が仕込まれた無数のナイフを投げるメルネス。

メルネス（M）「馬鹿野郎……」

ナイフが宙を舞うレオを貫く。

フェンリルがレオに飛び掛かり、その爪で肉を引き裂く。

リリ（M）「レオにいちゃん……！」

詠唱を終えたシュティーナ、その杖から渾身の雷霆がほとばしり、レオを捉える。

シュティーナ（M）「レオ……！」

『アンチ・レオ』の光が霧散していく……  
聞こえるはずのない呼びかけに応えるように、レオは言う。

レオ「おう、じゃあな……あとは、任せた」

微笑みながら、ゆっくりと地面に落下するレオ。  
そのまま動かなくなる——

哀しい目でレオを見つめている四天王。

全身の力が抜け、がつくりと両膝をつくエキドナ。

残された僅かな力で拳を握ると、

勝利の喜びと、やるせなさが緬い交ぜになった雄叫びをあげる。

エキドナ「うおおあああああああああああつ！！！」

エキドナの雄叫びが、山脈に響き渡って――

END

(ペラ換算82枚)